

集団成員への閾下単純接触が集団間評価に及ぼす効果

—— IAT を用いて ——

川上 直秋^{1,2} 吉田 富二雄 筑波大学

Effects of subliminal mere exposure to group members on intergroup evaluation:
Category evaluation measured in the Implicit Association Test (IAT)

Naoaki Kawakami and Fujio Yoshida (University of Tsukuba)

This study investigated the effects of subliminal mere exposure to ingroup or outgroup members on intergroup evaluation as measured in the Implicit Association Test (IAT). Participants first memorized the members of two groups. Then, they were assigned to either group by lot, and completed the IAT for intergroup evaluation (Time 1). In the next phase, half the participants were subliminally exposed to ingroup members and half to outgroup members. Upon completion of the exposure, the same IAT was administered at Time 2. The results showed that participants who were exposed to ingroup members evaluated the ingroup more positively at Time 2 than at Time 1. Participants who were exposed to outgroup members did not show an effect toward the outgroup. The finding that the mere exposure effect occurred only for the ingroup exposure condition suggests that unconscious awareness of the ingroup enhances the mere exposure effect.

Key words: mere exposure effect, Implicit Association Test (IAT), minimal group paradigm, subliminal.

The Japanese Journal of Psychology
2010, Vol. 81, No. 4, pp. 364-372

本研究では、内集団・外集団成員への閾下での単純接触が集団間評価に及ぼす効果を検討する。

ある対象に反復して接触することで、その対象に対する好意度が増す現象を単純接触効果という (Zajonc, 1968)。単純接触効果に関する従来の研究は、実験参加者に対して新奇な刺激を反復して呈示し、それらの好意度評定を求めるという手続きのもと、検討がなされてきた。その結果、接触経験のない刺激よりも、接触経験のある刺激の方が好ましく評価されることが多くの研究から示されている (Bornstein, 1989)。さらに、単純接触効果は、極めて短時間の閾下呈示による、反復接触した刺激を再認できない状況下においても生起することが明らかとされている (Kunst-

Wilson & Zajonc, 1980)。すなわち、自ら接触したという意識が伴わない場合であっても、その対象に対する好意度は増加するのである。また、用いられる刺激に関しても、幾何学図形 (Bornstein & D'Agostino, 1992) などの図形刺激、文字刺激 (Zajonc, 1968) を始めとし、人物の顔写真 (Zajonc, 1968) のような社会的な対象においても効果が確認されている。この単純接触効果は心理学の中でも極めて頑健な効果とされ、対象に対する相互作用を伴わない、“単なる (mere)” 反復接触が、その対象への好意度増加の十分条件となり得ることを示している。

さらに、単純接触効果は接触した人物と同じカテゴリに属する未接触の人物に対しても般化することが明らかとされた (Smith, Dijksterhuis, & Chaiken, 2008; Zebrowitz, White, & Wieneke, 2008)。Zebrowitz et al. (2008) では、白人を実験参加者として、アジア人顔写真への閾上での反復接触により、未接触のアジア人顔写真の好意度も増加した。一方、Smith et al. (2008) では、白人を実験参加者として、白人の顔写真への閾下での反復接触を行った結果、未接触の白人顔写真には変化は見られなかったものの、未接触の黒人顔写真に対する好意度が減少した。これらの結果

Correspondence concerning this article should be sent to: Naoaki Kawakami, Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan (e-mail: aki-kawa@human.tsukuba.ac.jp)

¹ 本研究の実施にあたり、筑波大学第二学群人間学類の青山 えりさん、岩城 聡美さん、得能 真里香さん、古田 沙織さん、水野 明日香さんにご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

² 日本学術振興会特別研究員

は、接触した成員と同じカテゴリに属する未接触成員への好意的影響という点で類似しているが、それぞれ異なる解釈が行われた。まず、Zebrowitz et al. (2008) は、接触したアジア人顔写真と外見上類似しているため、未接触のアジア人顔写真へも効果が一般化したという、刺激間の類似性に基づく解釈を行った。一方、Smith et al. (2008) は、カテゴリ事例への反復接触により、カテゴリ全体の好意度が増加した結果、そのカテゴリ内の未接触刺激へも一般が生じたと解釈した。確かに、人種の場合、共通の外見的特徴を持つ集団成員同士が一つのカテゴリを構成するため、類似性とカテゴリによる両方の解釈が成り立つ。しかし、Smith et al. (2008) においては、類似性に基づく白人への直接的な効果は見られず、それと対照的な黒人の好意度減少という形で効果であった。すなわち、白人・黒人間での相対的な関係において効果が生じており、そのためには“白人”、“黒人”というカテゴリの認識が不可欠であり、単に刺激間での類似性のみに基づいたものとは考え難い。したがって、単純接触効果は、刺激の物理的特徴に依存した現象ではなく、知覚者の主体的な認識をも含んだ現象と考えることができる。

さらに、Craver-Lemley & Bornstein (2006) では、知覚者の認識が、同じ刺激に対して異なる効果を生むことが報告された。その実験では、接触刺激としてウサギにもアヒルにも見える曖昧図形、評定刺激としてウサギ図形とアヒル図形が用いられた。その結果、曖昧図形の反復呈示の際にウサギとして教示された場合、ウサギ図形のみにおいて好意度が増加し、一方、アヒルとして教示された場合には、アヒル図形のみにおいて好意度が増加するという、選択的な効果が確認された。この場合、類似性という点では同一である。つまり、接触する刺激をどう捉えるかという、知覚者の認識に基づき効果が変化したといえよう。

では、この知見を Smith et al. (2008) などの集団の問題と重ねることで、何が考えられるか。一つに、知覚者がいる人物を内集団成員あるいは外集団成員とみなすかによって、効果が変化するのではないか。本研究では、最小条件集団パラダイムを用いることで、この問題に迫りたい。

集団所属性の観点からすると、集団間関係は自らの所属する内集団とそうでない外集団から成立するとされる (Tajfel, 1978, 1982)。一般的に、集団同士が対比的な関係にある場合、人は内集団に対して外集団よりも好意的な認知・感情・行動を示す (内集団バイアス)。加えて、この内集団バイアスを生み出す対比的な関係は、人種的対立や利害葛藤のような現実的な理由に限らず、単にくじ引きなどのランダムなカテゴリ分けによる、“我々 (内集団)” と “彼ら (外集団)” という集団関係の認識のみで充足されることが、

Tajfel, Billing, Bundy, & Flament (1971) により見出された。すなわち、個人を二つの集団にランダムに分割することによるカテゴリ化が、集団間の差異を明確化し、対比的な集団関係を生み出す。これは、ランダムな基準で分けられた二つの集団という認識以外の説明変数が排除された状況という意味で、特に最小条件集団パラダイム (minimal group paradigm) と呼ばれる。この場合、カテゴリ分けの基準は集団の認識のみであるため、人種のように外見上の類似性とカテゴリが一致することはない。したがって、このパラダイムを用いることで、同一人物に対する知覚者の認識のみを変化させ、類似性の問題と分離した純粋なカテゴリに基づく効果の検討が可能である。

さて、先ほどの問いに戻り、ある人物に対して内集団成員として接触した場合と、外集団成員として接触した場合で、単純接触効果は変化するであろうか。まず、単純接触効果の知見からすれば、接触する人物が内集団成員であれ外集団成員であれ、効果は生じると考えられる。ここで、最小条件集団パラダイムの説明理論である社会的アイデンティティ理論 (Tajfel, 1978, 1982) によると、人は自己の評価の一部を内集団に依存しており、内集団の評価を高めるよう動機づけられているとされる。つまり、外集団に対する内集団の優位性を維持するためである。そう考えるならば、内集団・外集団という対比的な集団関係が明確な場合には (詳細は後述)、反復接触は集団意識 (社会的アイデンティティ) を媒介として、内集団に対する評価を高める方向で作用する可能性がある。すなわち、内集団成員に反復接触する場合、内集団の評価を高めようとする集団意識の方向と、単純接触効果の方向が一致するため、単純接触効果は促進される。一方、外集団成員に反復接触する場合には、集団意識と単純接触効果の方向が不一致であるため、単純接触効果は抑制されると考えられる。

ところが、先行研究では一見この予測と一致しない結果も得られているようである。まず、Zebrowitz et al. (2008) では、アジア人 (外集団) への反復接触により、アジア人に対する好意度が増加している。他方で、Smith et al. (2008) では、白人 (内集団) への反復接触により、白人への好意度増加は見られなかったものの、黒人 (外集団) の好意度が減少している。これらの結果を集団関係の観点から解釈すると、重要な相違があることがわかる。それは、集団同士の対比的な関係の程度である。そもそも、内集団バイアスの定義にもある通り、集団同士の関係が問題となるのは、内集団に対して外集団よりも好意的な評価をするという、二つの集団が相対的 (対比的) な関係にある場合である。最小条件集団パラダイムにおいては、ランダムな基準で分けられた二つの集団、という認識以外の手掛かりを一切与えないことで、集団関係が明確

化され、自ずと集団間の対比関係が生み出される (Tajfel et al., 1971)。すると、Smith et al. (2008) における“白人”と“黒人”という集団同士は、一般的には対比的に捉えられる傾向があり、対比関係に近い。一方、Zebrowitz et al. (2008) における“白人”と“アジア人”という集団同士は、一般的に対比的な関係にあるとは考えられにくい。つまり、集団同士が対比的な関係にある場合、一方の集団への好意的 (否定的) 評価は同時にもう一方の集団への否定的 (肯定的) 評価を意味する。したがって、反復接触が内集団に対してひいき的に強く作用するのは、集団同士が対比的な関係にある場合であろう。逆に言えば、対比関係が明確でない場合には、外集団の評価を高めることは、内集団の評価を低減させることは必ずしも結びつかず、単純接触効果は抑制されない。すなわち、Zebrowitz et al. (2008) における“白人”と“アジア人”という関係は後者であり、外集団に対しても単純接触効果が生じたものと考えられる。さらに、Smith et al. (2008) での内集団成員への接触による外集団の好意度低下という結果も、この対比関係から解釈できる。すなわち、“白人”と“黒人”という対比関係においては、外集団の評価を低めることは相対的に内集団の評価を高めることと同じ意味を持つ。むしろ、単純接触効果の般化という観点からすれば、馴染みのある内集団成員の好意度よりも外集団成員の好意度の方が変化しやすいため、黒人の好意度を下げる形での相対的な単純接触効果が生じたと Smith et al. (2008) は考察した。実際、最小条件集団パラダイムに関わる研究では、集団同士を対比関係と捉え、集団間の相対的な評価として測定するため、分配マトリックスに代表される相対的な指標、つまり二つの集団が常に対比的な次元で評価される方法 (集団間評価) が用いられる。こういった点を踏まえると、先ほどの問いに対して、最小条件集団パラダイムに基づく集団分けから生じる対比的な集団関係において、ある人物に内集団成員として接触した場合には単純接触効果が促進され、外集団成員として接触した場合には効果が抑制されるという予測が導出される。すなわち、測定のレベルで言えば、内集団成員に接触した場合には効果が生じ、外集団成員に接触した場合には効果が生じないと考えられる。

また、Craver-Lemley & Bornstein (2006) では、刺激に対する知覚者の認識は実験者からの教示という外的な操作に基づいていた。しかし、このような認識は必ずしも受動的なものではない。特に、集団に代表されるカテゴリ認識は、無意識的かつ自動的に行われる (Devine, 1989)。実際、Smith et al. (2008) でも、刺激の関下呈示による方法で効果が認められたことから、内集団・外集団という認識も、接触したという意識が伴わない状況であっても生じる能動的なものと考え

えられる。

ここまでの議論から、本研究では最小条件集団パラダイムに基づいた内集団・外集団を形成し、各集団成員への関下での単純接触が集団間評価に及ぼす効果を検討することを目的とする。以下では、この目的に即し、効果の測定に関して先行研究からの改善点を二点挙げる。

第一に、カテゴリ評価に関わる点である。Smith et al. (2008) は、カテゴリ事例への反復接触は、接触をした当該対象のみならず、そのカテゴリ全体の好意度を増加させるという、単純接触効果のカテゴリへの般化を指摘した。この問題は、ある集団成員への接触がその集団全体への態度を改善させるという、極めて実践的な意義を有する。しかし、この点について直接的に検証されてはいない。なぜなら、Smith et al. (2008) では、カテゴリ自体の評価は測定されておらず、同じカテゴリに属する未接触刺激への評価をもって、推論的にのみ検討されたためである。したがって、カテゴリへの評価を直接的に測定できる手法を用いることで、この点は実証的に検討され得る。

第二に、評価における意識的統制の問題である。従来の単純接触効果研究では、刺激対象への好意度の測定の際に、段階評定などの自己報告に基づく直接的な測定が用いられてきた。しかし、近年では、自己報告に基づく測定には、意識的な統制 (voluntary control) が混入しやすいことが明らかとされている。特に、集団などの社会的な対象への評価には、社会的望ましさの影響が強く見られる他 (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)、事前・事後などの反復測定における回答の一貫性 (尾崎, 2006) などの影響も考えられる。

本研究では、これら二点の測定における問題点を踏まえ、Implicit Association Test (IAT; Greenwald et al., 1998) を用いて検討を行う。IAT は、各一対の対象カテゴリ (例えば、“花”・“虫”) と属性 (例えば、“快”・“不快”) を組み合わせ、どちらの対象カテゴリの方が“快”あるいは“不快”と強く結びついているかという連合強度を、分類課題に要する反応時間から算出する。IAT の具体的な手続きとしては、コンピュータ画面中央に一つずつ呈示される刺激 (例えば、ひまわり・たんぽぽ・くも・とんぼ・好き・美しい・嫌い・醜い) を、それぞれ割り当てられた左右のキーへ素早く分類する課題が行われる。左右のカテゴリの組み合わせとしては、(a) “花あるいは快”と“虫あるいは不快”、(b) “花あるいは不快”と“虫あるいは快”、の2通りがあり、連合の強いもの同士が同じキーに割り当てられていた場合、そうでない場合よりも分類が容易になり、結果として分類に要する反応時間が相対的に短いことが想定される。例えば、虫よりも花に好ましい印象を持っているなら、(b)よりも(a)の組

み合わせの方が、分類に要する反応時間が短い。つまり、(a)と(b)の平均反応時間の差分の大きさが、どちらの対象カテゴリの方が、“快”あるいは“不快”と強く連合しているかという、相対的なカテゴリ評価の指標(IAT効果)となる(Nosek, Greenwald, & Banaji, 2007)。したがって、本研究の場合、対象カテゴリとして、“内集団”と“外集団”という対となる集団を設定することで、その連合強度は集団間評価と解釈される。

このIATによる測定には、三つの特徴が挙げられる。第一に、直接的にカテゴリ評価が測定される点である。IATでは、参加者にカテゴリを構成する刺激へのカテゴリ分類課題を課すことで、個々の刺激に対する評価ではなく、カテゴリ自体に対する評価が測定される(Greenwald, Pickrell, & Farnham, 2002; Nosek et al., 2007)。すなわち、Smith et al. (2008)のような未接触刺激への般化という間接的なカテゴリ評価ではなく、より直接的に、集団というカテゴリに対する評価を測定することができる。第二に、意識的統制の影響を受けにくい点である。IATは参加者に対して、直接的に刺激対象への好意度を尋ねることのない間接的な測定である。そのため、社会的望ましさや、事前・事後測定における一貫した回答傾向などの意識的統制の影響が排除される。第三に、IATでは対となるカテゴリ同士の相対評価となる点である。したがって、二つの集団を対比関係として捉えた場合、IATは両集団間の相対評価となるため、最小条件集団パラダイムと当てはまりがよいと考えられる。以上より、本研究では、接触前・接触後の反復測定の参加者内計画により、IATを用いて集団成員への閾下での反復接触が集団間評価に及ぼす効果を検討する。また、同時に従来の自己報告において集団成員への評価を測定し、間接的な測定と比較する。

ここまでの議論を踏まえた、単純接触効果に関わる仮説を示す。まず、内集団成員に反復接触した場合、内集団に対する相対的な好意度が増加するであろう(仮説1)。同時に、外集団成員に反復接触した場合、好意度に変化はないであろう(仮説2)。

また、最小条件集団パラダイムに基づけば、以下の仮説も導出される。集団成員へ接触する前の段階において、内集団バイアス(外集団よりも内集団に対して好意的評価を行う)が生起するであろう(仮説3)。

方 法

実験参加者 大学生39名(男性20名、女性19名)であった。平均年齢は20.56歳($SD=1.58$)であった。

実験デザイン 接触対象(内集団成員・外集団成員)を実験参加者間要因、測定時期(接触前・接触後)を実験参加者内要因とする2×2の2要因混合計

画であった。

実験装置 刺激の呈示及びIATによる反応時間の記録にはパーソナルコンピュータ(Dell社製)、17インチCRT画面(Iiyama社製)を使用し、ソフトウェアにはMillisecond社Inquisit2.0を使用した。

刺激材料 日本人大学生顔写真を用いた。刺激として用いる顔写真の選定に当たって、大学生20名(男性10名、女性10名)を対象に予備調査を行った。予備調査の目的は、好意度が中程度の顔写真を選定するためであった。調査協力者には、100枚(男女各50枚)の大学生顔写真について、それぞれ“どの程度好きですか”という教示に対して、“かなり嫌い(1)―かなり好き(7)”の7段階で回答を求めた。その結果から、評定平均値が理論的中間値である4付近(3.75―4.25)に収まり、標準偏差が比較的小さかった(0.7以下)男女の顔写真をそれぞれ4枚ずつ選定した。以上の予備調査の結果から抽出された計8枚の顔写真を、好意度に偏りのないよう4枚ずつ(男女各2枚)2セットに分割し、それぞれ“408”セットと“411”セットとし、実験に用いた。また、IATにおける“快”を表す刺激語として、“良”、“美”、“好”、“嬉”、“優”の5語、“不快”を表す刺激語として、“悪”、“醜”、“嫌”、“悲”、“劣”の5語を用いた。画面に呈示された刺激のサイズは、顔写真が縦約4cm×横約3cm、1文字の漢字が縦約1.5cm×横約1.5cmであった。実験時の観察距離は約70cmであった。

IATを用いた連合強度の測定 内集団と外集団のどちらの方が、“快”・“不快”という属性と強く結びついているか、その連合の程度をIATによって測定した。実験参加者には具体的な手続きとして、画面中央に順に呈示される刺激が、画面上部の左右に表示されている二つのカテゴリのいずれかに当てはまるかをキー押しで回答するよう求めた。IATは主に五つのブロックから構成された。1ブロック目は、画面中央に順に呈示される8枚の顔写真を内集団か外集団に分類する練習課題20試行(カテゴリラベルは“408・411”)、2ブロック目は、同様に漢字10語を“快・不快”に分類する練習課題20試行であった。3ブロック目は1・2ブロック目の“内集団・外集団”と“快・不快”の2対のカテゴリを、それぞれ一つずつ組み合わせた分類課題の練習試行20試行、及び本試行40試行であった(例えば、“内集団・快・外集団・不快”)。続く4ブロック目は2ブロック目の“快・不快”の配置を左右逆転した分類課題20試行、5ブロック目は3ブロック目の“快・不快”の配置を左右逆転させた組み合わせ分類課題の練習試行20試行及び本試行40試行であった(例えば、“内集団・不快・外集団・快”)。例えば、“内集団・快(左のキー)・外集団・不快(右のキー)”ブロックにおいては、画面中央

に呈示される刺激が内集団成員の顔写真か快を表す漢字の場合は左のキーへ、外集団成員の顔写真か不快を表す漢字の場合は右のキーへ分類しなければならず、それ以外は誤答（例えば、外集団成員の顔写真、あるいは不快の漢字を左のキーへ分類）となる。いずれのブロックにおいても、回答キーには“E”と“I”を使用し（左右の人差し指での回答）、正しいキーが押されるまでの反応時間を記録した。また、回答が間違っている場合には“×”を画面上に呈示し、すぐに正答キーを押すよう教示した。なお、組み合わせ課題を実施するブロックに関して、“内集団-快・外集団-不快”あるいは“内集団-不快・外集団-快”のどちらを先に実施するかは、実験参加者ごとにランダムに決定した。

自己報告による測定 従来用いられてきた自己報告による段階評価において、両集団成員に対する評価を測定した。画面上に内集団成員、外集団成員の顔写真各 4 枚を、1 枚ずつランダムに呈示し、“写真の人物についてどのように感じますか？”に対して、それぞれ“かなり嫌い (1) - かなり好き (7)”の 7 件法でキーボードを用いて回答を求めた。

手続き 実験は二つの実験室を用い、個別に実施した。実験は六つのフェイズから構成された。

1. 集団成員記憶フェイズでは、実験者は実験参加者に、“本実験の目的は、人がどれだけ早く視覚的な情報を処理できるかを調べることである。”と教示し、パソコン画面の前に案内した。着席後、“実験は二つのグループに分かれ、それぞれ異なる実験室（408 実験室あるいは 411 実験室）で実験を行ってもらう。それに当たり二つのグループのメンバーを覚えてもらう。”と教示した。実験参加者の同意後、画面上に、顔写真とその下にそのメンバーの属するグループの名前（“408”あるいは“411”）を、画面上部に 4 枚、下部に 4 枚、計 8 枚表示した。なお、画面上における顔写真の配置は実験参加者ごとにランダムに決定された。以上、8 枚の顔写真を 1 分間で記憶するよう求めた。

2. 集団割り当てフェイズでは、最小条件集団パラダイムに基づいて集団分けを行った。具体的には、くじ引き（吉田・久保田, 1994）を用いて、実験参加者を“408”あるいは“411”のいずれかのグループに割り当てた。すなわち、くじにより割り当てられたグループが実験参加者にとって内集団となり、もう一方のグループが外集団となった。また、割り当てはくじ引きのため、各実験参加者がいずれのグループに割り当

てられるかは、ランダムであるとの教示をした。実際には、セット間でのカウンターバランスをとるため、“408”と“411”に割り当てられる人数が等しくなるようにくじを操作していた。

3. 接触前測定フェイズでは、実験参加者をくじ引きにより、“408”あるいは“411”のいずれかのグループに割り当てた後、自分の属する実験室へと案内した。なお、実験室は部屋番号の表示のみを変え、同一の実験室を用いた。実験室に到着すると、“先ほどの人物を正確に記憶できているかを確認するため、分類課題に取り組んでもらう”と告げ、IAT 並びに自己報告による評価への取り組みを求めた⁴。

4. 接触フェイズでは、接触前測定フェイズ終了後、実験参加者に、“視覚的情報の処理速度を調べるため、これから瞬間的に様々な写真を表示する。どんな写真が出てきたか後で尋ねるので、注意して見るように。”との教示を行った。内集団接触条件の実験参加者には、内集団成員の顔写真 4 枚をそれぞれ 15 回ずつ、フィラー刺激として内集団でも外集団でもない人物の顔写真 4 枚をそれぞれ 5 回ずつランダムに呈示した。同様に、外集団接触条件の実験参加者には、外集団成員の顔写真 4 枚を 15 回ずつ、フィラー刺激 4 枚を 5 回ずつランダムに呈示した。具体的には、画面中央に 1 000 ms 注視点を呈示した後、8 ms 顔写真を呈示した。顔写真呈示後、200 ms マスク画像を呈示した。こうした試行を計 80 回続けた。試行間のインターバルは 1 000 ms であり、その間は画面には何も呈示しなかった。

5. 接触後測定フェイズでは、接触前測定フェイズと同一の IAT 並びに自己報告による評価への取り組みを求めた。

6. 再認判断フェイズでは、再認記憶課題への取り組みを求めた。この課題では、接触フェイズで呈示した顔写真 8 枚と、呈示していない顔写真 8 枚を同性のペアにし、順序及び左右の配置をランダムにして呈示した。実験参加者には、先ほどの瞬間的な写真の表示の際に見た方の顔写真を選択するよう求めた。こうした試行を計 8 回続けた。

結 果

IAT 効果の算出

内集団と外集団間での相対的評価となる連合強度を、IAT 効果として算出するに先立ち、以下の三つ

³ Nosek et al. (2007) によって、それぞれのカテゴリに含まれる刺激の数と試行数は、連合強度及び信頼性には影響を与えないことが指摘されているため、本研究では本試行において 40 試行を行った。

⁴ Hofmann, Gawronski, Gschwendner, Le, & Schmitt (2005) による IAT を用いた実験のメタ分析の結果、IAT の後に質問紙への回答という順序の効果は、基本的には認められないという知見に基づき、本研究では IAT の後に質問紙という順序の手続きをとった。

の手続きをとった。第一に、本試行において誤答の多い実験参加者を除外するため、誤答率が20%を超えた2名の実験参加者は分析から除外した。さらに、教示に従わなかった1名を除外した結果、以降の分析には36名のデータを用いた。第二に、本試行における反応時間について、各ブロックの最初の2試行は反応時間が長くなるため除外した (Greenwald et al., 1998)。第三に、本試行ブロックにおける試行の外れ値の影響を統制するため、実験参加者ごとの二つの本試行ブロックそれぞれの平均反応時間 $\pm 3SD$ を超える試行については、平均反応時間 $\pm 3SD$ を境界値として割り当てた。以上の手続きの後、実験参加者ごとに本試行である“内集団-快・外集団-不快”ブロック38試行と、“内集団-不快・外集団-快”ブロック38試行の平均反応時間を、接触前測定、接触後測定それぞれに対して算出した。さらに、分類課題における反応時間の個人差を統制するため、個人の平均反応時間からのズレの割合という形で数値化される基準化手続きをとった。具体的には、“内集団-快・外集団-不快”ブロックと“内集団-不快・外集団-快”ブロックのそれぞれの平均反応時間から両ブロックを合わせた平均反応時間の差をとった。続いて、その差分を両ブロック合わせた平均反応時間で除し、基準化得点とした。さらに、“内集団-不快・外集団-快”ブロックの基準化得点から、“内集団-快・外集団-不快”ブロックの基準化得点を差し引いた値をIAT効果とした。IAT効果の値が大きいほど、“内集団”と“快” (“外集団”と“不快”) の連合が、“外集団”と“快” (“内集団”と“不快”) の連合よりも強いことを意味する。すなわち、IAT効果の値が正の方向に大きいほど、外集団よりも内集団に対して好意的評価を表し、逆に負の方向に大きいほど、内集団よりも外集団に対して好意的評価を表す。

IAT効果の分析

IAT効果を指標として、接触対象 (内集団・外集団) を実験参加者間要因、測定時期 (接触前・接触後) を実験参加者内要因とした 2×2 の2要因分散分析を行った⁵。条件ごとのIAT効果平均値をFigure 1に示した。その結果、接触対象 \times 測定時期の交互作用のみ有意であり ($F(1, 34) = 5.46, p < .05$)、単純主効果検定を行った。その結果、内集団接触条件において、接触前測定 ($M = .005, SD = .13$) よりも接触後測定 ($M = .07, SD = .10$) においてIAT効果が有意

に大きかった ($F(1, 34) = 5.96, p < .05$)。外集団接触条件においては、接触前測定 ($M = -.009, SD = .11$) と接触後測定 ($M = -.01, SD = .16$) との間に有意な差は見られなかった ($F(1, 34) = 0.75, ns$)。

また、接触前測定及び接触後測定における内集団バイアスの生起を検討するため、IAT効果を指標として、母平均値=0を帰無仮説とする t 検定を行った。その結果、接触前測定においては、内集団、外集団接触条件ともに、0から有意な差はなかった (順に、 $t(17) = 0.16, ns, t(16) = 0.66, ns$)。すなわち、くじ引きのみによる内集団バイアスは確認されなかった。接触後測定においては、外集団接触条件で、0から有意な差は見られなかったものの ($t(16) = 0.15, ns$)、内集団接触条件では、有意に0より大きいIAT効果が確認された ($t(17) = 2.82, p < .05$)。すなわち、接触前測定では生起していなかった内集団バイアスが、内集団成員に反復接触した場合のみ、生起することが確認された。

自己報告による評価の分析

刺激写真8枚について、内集団と外集団ごとに評定値の平均値を算出した。条件ごとの各平均値をTable 1に示した。まず、内集団評定値を指標として、接触対象 (内集団・外集団) を実験参加者間要因、測定時期 (接触前・接触後) を実験参加者内要因とした 2×2 の2要因分散分析を行った。その結果、いずれの主効果及び交互作用は見られなかった ($F_s < 1.5, ns$)。続いて、外集団評定値を指標として、同様の分散分析を行った結果、いずれの主効果及び交互作用は見られなかった ($F_s < 1, ns$)。

再認判断の分析

全実験参加者の再認判断における平均正答率を算出した ($M = 52.43, SD = 22.52$)。平均正答率を指標と

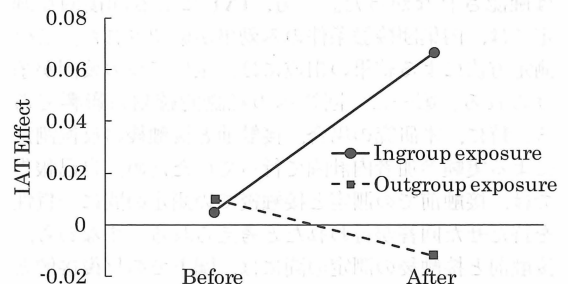


Figure 1. Mean IAT effects for the ingroup exposure and outgroup exposure conditions. Note that the theoretical median is 0. Positive values indicate more positive evaluations toward the ingroup than the outgroup. Negative values indicate more positive evaluations toward the outgroup than the ingroup.

⁵ 予備的な分析として、カウンターバランスをとったセット (“408”・“411”) の要因の効果を、IAT及び自己報告による測定のそれぞれで検討した。その結果、両測定について、セット要因に関わる主効果及び交互作用はいずれも有意ではなかった ($F_s < 1.5, ns$)。以上の結果、セットによる影響が見られなかったため、以降の分析ではセットの要因を除外した。

Table 1
Mean self-report ratings for the ingroup exposure
and outgroup exposure conditions

Target groups	Time of measurement			
	Before		After	
	M	SD	M	SD
Ingroup				
Ingroup exposure	4.13	.46	4.04	.50
Outgroup exposure	4.13	.46	4.22	.47
Outgroup				
Ingroup exposure	4.24	.72	4.29	.57
Outgroup exposure	4.11	.66	4.10	.74

Note that the theoretical median is 4.00.

して、チャンスレベル（50%）を基準とした t 検定を行った。その結果、平均正答率はチャンスレベルを有意に上回ることにはなかった ($t(35)=0.65$, ns)。すなわち、実験参加者は各刺激が呈示されていたことを再認することはできなかった。

考 察

本研究では、内集団・外集団成員への関下での単純接触が、集団間評価に及ぼす効果を、間接的測定によるカテゴリ評価として検討した。その結果、内集団成員に反復して接触した場合のみ、IAT による間接的な測定において、その集団に対する相対的な好意度が増加することが明らかとなった。それに伴い、接触前では見られなかった内集団バイアスが、接触後においては確認された。以下の考察では、まず、IAT を用いた間接的な測定と、従来の自己報告による直接的な測定との差異について論じ、続いて、序論から導出された仮説について結果と照らし議論する。

従来の自己報告による直接的な測定においては、内集団接触条件、外集団接触条件ともに反復接触の効果は確認されなかった。一方、IAT による間接的な測定では、内集団接触条件のみ効果が確認された。この測定方法による結果の相違には、主に二つの要因が挙げられる。第一に、回答への意識的統制の影響である。特に、本研究の場合、接触前と接触後の反復測定による実験参加者内計画で行っていたため、自己報告では、接触前での測定と接触後での測定の間に一貫性を持たせた回答が行われたと考えられる。すなわち、接触前と接触後の測定の間には、関下での反復接触という、極めて曖昧な実験操作が短時間行われたのみであり、実験参加者は接触後の評定においても、接触前と近似した回答を行ったものと考えられることができる。一方、IAT による間接的な測定では、回答への意識的統制が働きづらい (Greenwald et al., 1998; 尾崎, 2006)。そのため、接触前と接触後で一貫性を持たせ

た回答が行われず、好意度の変化が認められたと考えられる。第二に、測度の質的な違いの影響である。自己報告による測定では、接触の繰り返しのみによって生じる捉えにくい変化にもかかわらず、実験参加者に対して当該対象についての好意度を“好き-嫌い”の段階的な次元で直接的に尋ねる。そのため、実験参加者自身が捉えにくい変化にまず気づくことが必要となり、判断は難しくなる。一方、IAT では、好意度が当該対象を含むカテゴリと属性間での結びつきの強さの形で、間接的に反応時間によって測られる。そのため、わずかな好意度の変化を鋭敏に捉えやすかった可能性もあろう。実際には、どちらか一方の影響というよりも、両者の影響が混在した形で、自己報告では見られなかった接触による好意度の変化が、IAT による間接的な測定を用いた場合、鋭敏に確認されたものと考えられる。以上の測定方法による結果の相違を踏まえ、以下では、仮説について、IAT による間接的な測定から得られた結果を中心に論ずる。

まず、内集団成員に反復接触した場合、内集団に対する相対的な好意度が増加する (仮説 1)、外集団成員に反復接触した場合には効果が生じない (仮説 2)、という単純接触効果に関わる二つの仮説は支持された。このことから、集団成員への反復接触がその集団に対して好意的影響を与えるという効果は、内集団成員に反復接触した場合のみに生じる選択的な効果であると言える。この結果は、単純接触効果の観点からすると、示唆に富む知見である。すなわち、これまでの単純接触効果研究から予測されることは、内集団・外集団を問わず、接触した集団への好意度が (相対的に) 増加するという点であった。しかし、本研究では、外集団接触条件では単純接触効果は見られず、内集団接触条件のみ効果が確認された。つまり、集団間における単純接触効果には、接触する人物が内集団であるか、あるいは外集団であるかというカテゴリ認識が媒介とされ、接触する人物が内集団だと認識される場合のみ効果が生じる。この知見は、接触対象に対する知覚者の認識による効果の変化という点で、Craver-Lemley & Bornstein (2006) の曖昧図形を用いた研究と一致する。このことから、単純接触効果は単に刺激の物理的特徴に依存した現象ではなく、知覚者の認識というより高次の認知プロセスを含む現象であることが本研究からも示された。そして、Craver-Lemley & Bornstein (2006) と本研究の違いを強調するならば、それは知覚者の認識の源泉であると考えられる。Craver-Lemley & Bornstein (2006) における知覚者の認識は、実験者からの教示による受動的なものであったのに対して、本研究では、知覚者による自発的なカテゴリ認識であった。さらに、顔写真の関下呈示において見られたことから、このカテゴリ認識は無意識的かつ自動的であったことが窺える。すなわち、

無意識的なカテゴリ認識を媒介とし、社会的アイデンティティ理論に基づいた内集団の評価を高めようとする動機づけが、内集団成員に反復接触した場合には効果を促進した一方、外集団成員に反復接触した場合には効果を抑制したと考えられる。

さらに、本研究の知見は、集団を対象にした従来の研究へもいくつかの示唆を有する。これまで、接触した成員の属する集団の未接触成員に対しても効果が般化することはいくつかの研究から示されていた。そして、その解釈には、外見の類似性に基づく解釈 (Zebrowitz et al., 2008) と、カテゴリ全体への般化による解釈 (Smith et al., 2008) の二つが成り立つことは序論で議論した通りである。これらの解釈に対して、本研究での以下の2点が有効である。第一に、IAT というカテゴリ全体の評価を測定する手法によって効果が確認された。すなわち、カテゴリ事例への反復接触は、そのカテゴリ全体に対する好意度を増加させることが示された。第二に、最小条件集団パラダイムを用いることによって、類似性とカテゴリが一致しない状況で効果が確認された。すなわち、類似性の要因を排除した、集団認識のみに基づくカテゴリでの効果であった。これら二つの結果を踏まえると、集団を対象とした場合には、Smith et al. (2008) の指摘するように、集団成員への反復接触はカテゴリ認識を媒介として、その集団全体の好意度増加をもたらすことが示唆される。ただし、対比的な関係にある内集団・外集団同士においては、集団意識が内集団に対する効果を促進する一方、外集団に対しては抑制的に作用し、結果として内集団成員に反復接触した場合のみ、その集団への好意度が増加するという限定的な形で現れることが示された。

続いて、最小条件集団パラダイムによって、接触前の段階で内集団バイアスが確認されるであろうとした仮説3は支持されなかった。この理由として従来の最小条件集団パラダイムに関わる研究と、本研究との相違点から考察する。まず、内集団バイアスの測定の次元の問題が挙げられる。最小条件集団パラダイムを用いた多くの研究では、内集団バイアスを分配マトリックス (Tajfel et al., 1971) によって測定してきた。分配マトリックスとは、規定の得点を内集団成員と外集団成員に分配する課題を指す。すなわち、外集団よりも内集団に対して、多くの得点を分配するか否かが内集団バイアスの基準となる。換言すれば、分配マトリックスにより測定される内集団バイアスは、内集団をひいきする行為、すなわち広い意味での行動レベルのバイアスであると考えられる。一方、本研究では、単純接触効果研究に基づき、外集団よりも内集団を好意的に評価するか否かという基準で内集団バイアスを測定した。換言すれば、内集団に対する好意的評価、すなわち評価レベルでの内集団バイアスである。実際、

神・山岸・清成 (1996) は最小条件集団パラダイムによる内集団バイアスについて、分配による行動レベルと個人特性による評価レベルでの次元を区別して論じている。このことから、本研究で行動レベルでの指標を用いることはなかったが、間接的な測定による評価レベルでの内集団バイアスは、くじ引きによる操作のみでは生起しないことが示唆される。第二に、意識の焦点の問題がある。従来の最小条件集団パラダイムでは、集団成員が匿名的な状況での検討であり (吉田・久保田, 1994)、その意味で成員個人よりも、集団という意識へ焦点が向く。一方、本研究では、顔写真を用いていたため、集団よりも成員個人へ意識が向き、その結果、集団の意識に基づく内集団バイアスが見られなかった可能性がある。しかし、接触後の測定においては、内集団接触条件で評価レベルでの内集団バイアスが生起していた。Greenwald et al. (2002) は、集団成員の名前を記憶することがその集団への自己同一化を促進することを、IAT を用いて見出した。これに本研究での知見を重ねると、集団への自己の同一化に加え、集団成員への接触はその集団に対する好意的評価に繋がるものと考えられる。

最後に、本研究は応用的な観点にも一定の示唆を与えるものと考えられる。これまでの研究では、人種という社会歴史上を通して既存の価値を持った集団を対象に検討がなされてきた。一方、本研究では、即時的な集団認識のみに基づくという、集団関係の極めて初期段階を扱った。そして、接触前には生じなかった評価レベルでの内集団バイアスが、内集団成員への接触後には生じた。この知見から推察するに、人は日常的に内集団成員と接触する機会が多く、必然的に内集団バイアスが生じ、また強化されるであろう。さらに、その強化されたバイアスのため、選択的に内集団成員との接触がより増えることも考えられる。他方で、外集団に対しては接触してもその効果が弱い。すなわち、単純接触効果の観点からすれば、日常生活において、接触、内集団バイアスの強化、さらなる接触の増加、内集団バイアスの強化、のような循環的かつ蓄積的な過程を経て、容易には変化しにくい安定した集団間関係が成立するものと考えられる。

引用文献

- Bornstein, R.F. (1989). Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968-1987. *Psychological Bulletin*, 106, 265-289.
- Bornstein, R.F., & D'Agostino, P.R. (1992). Stimulus recognition and the mere exposure effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 545-552.
- Craver-Lemley, C., & Bornstein, R.F. (2006). Self-generated visual imagery alters the mere exposure effect. *Psychonomic Bulletin and Review*, 13, 1056-

- 1060.
- Devine, P.G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Greenwald, A.G., McGhee, D.E., & Schwartz, J.L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A.G., Pickrell, J.E., & Farnham, S.D. (2002). Implicit partisanship: Taking sides for no reason. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 367-379.
- Hofmann, W., Gawronski, B., Gschwendner, T., Le, H., & Schmitt, M. (2005). A meta-analysis on the correlation between the Implicit Association Test and explicit self-report measures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1369-1385.
- 神 信人・山岸 俊男・清成 透子 (1996). 双方向依存性と“最小条件集団パラダイム” 心理学研究, **67**, 77-85.
- (Jin, N., Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (1996). Bilateral dependency and the minimal group paradigm. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 77-85.)
- Kunst-Wilson, W.R., & Zajonc, R.B. (1980). Affective discrimination of stimuli that cannot be recognized. *Science*, **207**, 557-558.
- Nosek, B.A., Greenwald, A.G., & Banaji, M.R. (2007). The Implicit Association Test at age 7: A methodological and conceptual review. In J.A. Bargh (Ed.), *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes*. New York: Psychology Press. pp. 265-292.
- 尾崎 由佳 (2006). 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, **45**, 98-110.
- (Ozaki, Y. (2006). Changing implicit attitudes by repeated approach or avoidance. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **45**, 98-110.)
- Smith, P.K., Dijksterhuis, A., & Chaiken, S. (2008). Subliminal exposure to faces and racial attitudes: Exposure to Whites makes Whites like Blacks less. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 50-64.
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. London: Academic Press.
- Tajfel, H. (1982). Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, **33**, 1-39.
- Tajfel, H., Billings, M.G., Bundy, R.P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149-178.
- 吉田 富二雄・久保田 健市 (1994). 社会的カテゴリー化による少数派および多数派集団の集団間差別行動——最小条件集団パラダイムを用いて——心理学研究, **65**, 346-354.
- (Yoshida, F., & Kubota, K. (1994). Minority versus majority: Intergroup discrimination in the minimal group paradigm. *Japanese Journal of Psychology*, **65**, 346-354.)
- Zajonc, R.B. (1968). Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 1-27.
- Zebrowitz, L.A., White, B., & Wieneke, K. (2008). Mere exposure and racial prejudice: Exposure to other-race faces increases liking for strangers of that race. *Social Cognition*, **26**, 259-275.

—— 2009. 5. 13 受稿, 2010. 3. 6 受理 ——